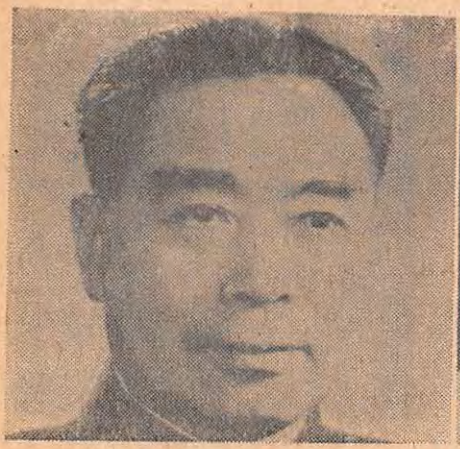
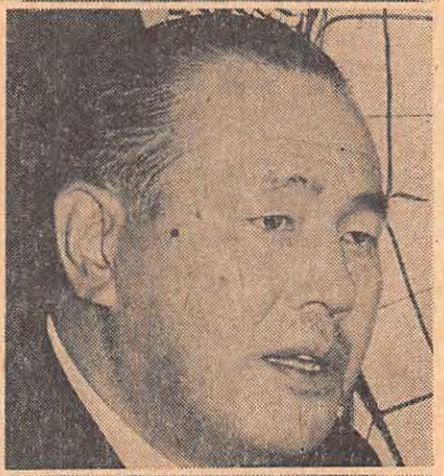


# 周恩来はなぜ日中国交回復を急ぐか

中国の意外なまでの対日急接近の謎を明かしバラ色の日中接近の問題を指摘して正常化への正しい道を探る

中島嶺雄（たかしまみねお）
（東京外語大助教授）



## 二十世紀最大の政治家周恩来

日中正常化ムードが高まるなかで、このところ日本側よりもむしろ中国側の方が日中関係の打開により積極的な姿勢を示しているかにみえる。もとより、わが国においては、政財界、マスコミをはじめとして日中関係打開への動きはすでに過熱しつくしており、いまや両者があいまって、田中内閣出現以来のこの二ヵ月余り、日中関係は急速に展開し、従来の経緯と比べたとき、それは日中正常化というより、むしろ日中異常化といった方が適切であるかのような雰囲気である。

そこで、ここではまず、なぜ中国がこのように対日政策を大きく変化させたかという問題を考えてみたいが、その前提として、周恩来首相がいま、どのような対内的・対外的なイメージを持っているのかを推察してみる必要がある。

この点でまず第一に考えねばならないのは、最近の中国内政の著しい変化であり、それは、林彪失脚、そして文革否定という大きな代価を払って達成されつつある変化だということである。このような変化にたいし周恩来はすぐれた適応能力をもっているが、考えてみると、周恩来はきわめて卓越した政治家であるという一般の評価以上に、流動化する政治情勢にいかに対応してゆくかという能力においても一頭ぬきんでているといえよう。しかもそのような政治情勢の変化を、周恩来が表面でつくり出していくというポーズなり、印象なりを極力与えないというところに彼のすぐれた能力があるように思う。その意味からして、毛沢東が偉大な革命家であるのにたいし、周恩来はまさに二十世紀最大の政治家であると考えることができる。

同時に革命家としての毛沢東が築こうとした中国社会、つまり「毛沢東の中国」への周恩来の賛意には、常に一定の間隔があったように思われる。この間隔は考えてみると、周恩来が「毛沢東の中国」に対して常に疑問を持っていたのではないかと解釈することもできる。

## 「毛沢東の中国」からの脱皮

近い例では、文化大革命の時期をふりかえっても、一九五六年春、日本共産党が中国共産党と決裂する過程を見れば明らかなように、周恩来は当時、劉少奇、鄧小平らの実権派指導者と同一の歩調をとっており、毛沢東がすでに前年秋、上海からのろしをあげていた文化大革命に全面的に賛意を示したのではなかった。

一方このとき早くも毛沢東の文化大革命をプレイアップしていたのは林彪国防部長であった。

文化大革命の初期の段階の周恩来は、劉少奇たち実権派の基盤が非常に強かっただけに、情勢を静観していたが、ここは毛沢東にかけるべきだといったん決めた暁には、まさに粉骨砕身、毛沢東、林彪に賭けた。このような周恩来の政治的リアリズムというものは、中国の他の指導者には見られないものではないかと思われる。

よく周恩来はナンバー2にならない、常にナンバー3でいるということをいわれる。最近も林彪失脚のあと、実質的にはナンバー2であり、今日の中国の最も中心的な役割を担っていながら、黄必武あるいは朱徳というような元老を序列的には立てることによって、自らが林彪なきあとのナンバー2であるという印象をぬぐおうとしている。

このように周恩来というのは、確かに百戦錬磨の林彪以下の軍人首脳をもしのぐ卓越した政治力を持っているというふうに考えてよいだろう。

私が中国を訪問した一九六六年秋、周恩来は「毛主席万歳」という大衆の熱狂的な雰囲気の中で、彼自身も『毛語録』をふりかざし、「毛主席万歳」、「文化大革命万歳」を唱え、そして、林彪の偉大な功績を称えていたけれども、それは決して周恩来の本心ではなかったように感じる。

周恩来としては、むしろ常に一定の距離を保ちながら、「最後に笑う」べき瞬間をジーッと待っていたのではないだろうか。そして、現在でもこうしたことがいえるのかもしれない。

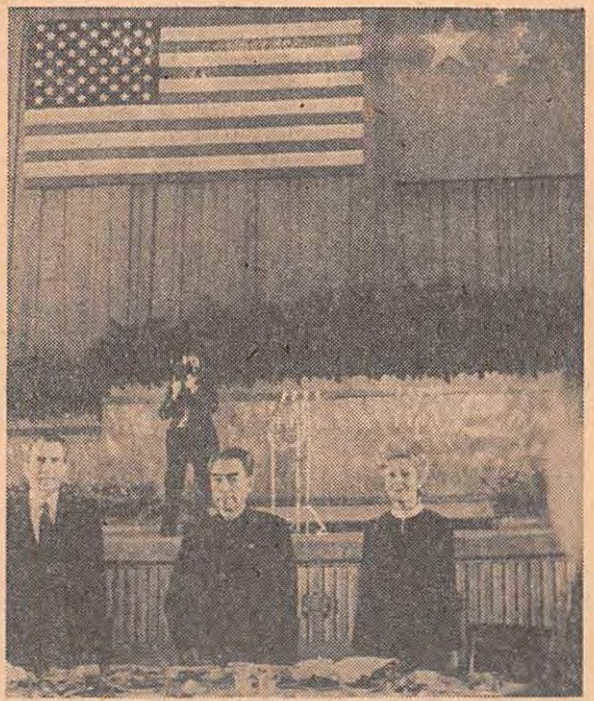
今日、周恩来は、これまでの路線闘争で失墜した有能な人材を次々に復権させつつ、自己のリーダーシップを着々と固めているようにみえる。

このようにして復権した旧幹部には、たんに文化大革命のみならず、反右派闘争、「大躍進」政策批判、そして文化大革命という過程で失脚していった人物が含まれており、それぞれ「毛沢東の中国」に何らかの疑問を提起し、それゆえに失脚していった人々であり、それにもかかわらず周恩来がこれらの人物を復権させようとしていることは、いわば「毛沢東体制下の非毛沢東化」を周恩来が徐々に進めていることを明かに物語るものである。

このような周恩来は、毛沢東が形成しようとした中国社会に、むしろ一貫して疑問を持ち続け、そのことは、今日ますます明らかになっているように思われる。

ただ彼は、かつて彭徳懐がそうであり劉少奇がそうであり、また林彪がそうであったよ

うに、明示的な反毛沢東路線をとることのマイナス面と、その恐るべきリスクを知りすぎているがゆえに、まさに「毛沢東体制下の非毛沢東化」をきわめて静かな潮流の中で達成しようとしているのであり、決してドラスティックな転換をはかろうとしているのではない。



七二年最大のセレモニー、ニクソン米大統領北京訪問

## 「革命外交」よさらば

国内的に考えると、まず周恩来は、文化大革命そのものを必要悪であったというふうに思っていたようだ。必要悪である限りにおいて彼は全面的に毛沢東と林彪に与した。しかしいま、周恩来は自らのイニシアティブによって文化大革命の"悪"の部分を大きく修正しようとしているかにみえる。というのは、林彪の罪状の一つにイギリス大使館焼き打ち事件があげられているからである。なぜならば、これを林彪の罪状にするにはあまりにも事態を単純化しすぎており、そこにはさらに文革のもう一人の司令であった陳伯達につながる極左組織「五・一六兵団」の問題があり、同時に江青夫人を通して毛沢東そのものの責任にもなりかねない問題がある。

それにもかかわらずこれを林彪一人の責任に転嫁しようとする意図が明らかに見られるように私には思える。

つまり、周恩来は今日、文革のいわば悪しき部分を払拭することによって、中国全体に脱文革・文革否定というようなムードをつくりつつある。これが今日、周恩来が感じている国内イメージの大きなバックグラウンドであって、今日の中国の内政的な変化は、単に周恩来が柔軟性を取り戻したということだけでなく、こうした周恩来の文革像ないしは毛沢東像、そして中国社会主義像というものに照らして考えてみないと最近の動きは理解できないように思う。しかも内政的に緊張が緩和し、情勢が穏健化すれば、必ず周恩来及び周恩来系統のリーダーシップが中国政治の前面に出てくることは、これまでの歴史が証明していることである。

以上のような内政面での変化と周恩来のリーダーシップの定着は、第二の問題として、中国外交の選択の幅を著しく増大させることに当然つながってくる。この点で考えなけれ

ばならないのは、「革命外交よ、さらば」という問題ではないか。周知のように、文化大革命期の中国はもとより、これまでの中国、少なくとも毛沢東の対外政策は、アジア、アフリカ地域における民族解放武装闘争を第一義的に追求する革命外交のパターンをとってきた。

これに対して周恩来は毛沢東型革命外交に反対するということではないにしても、むしろ毛沢東型革命外交のロスをあまりにも多く知り過ぎた人物ではなかろうか。それはたとえば一九六五年のインドネシア九・三〇事件などがいかに多くのロスと中国イメージの失墜とをもたらしたかについて、彼は十分知ってきただろうし、かつてのアジア・アフリカ地域における毛沢東型ゲリラ戦略がどれも成功していないことをいちばんよく知っているのも周恩来であった。

世界に毛沢東型革命が成功した例は一つもない。このことをわれわれは思い起こしてみる必要があろう。そしてこのロスとダメージを、いつも尻ぬぐいしてきたのが周恩来であった。

この場合に考えなければならないのは周恩来の対外イメージという問題である。「文革よ、さらば」というのが対内イメージであるならば、「革命外交よ、さらば」は国連参加後の中国の国際イメージとして、周恩来が描いていることなのである。

今日の世界は非常に多極化し、流動化しており、そうした状況のなかで冷戦構造そのものが完全に打破され、そして一方における中ソ対立にみられるように、社会主義の側にもかつてのような国際主義的な連帯は失われている。むしろ各国がそれぞれのナショナル・インタレストに従って行動しつつある。当面そうした情勢のなかで世界は多元的流動化を続けるであろうことを、周恩来は最近強く感じはじめているのではないか。この点も毛沢東型の世界認識とは大きく異なるように思われる。よく知られているように、毛沢東の世界革命認識は、いわば中国革命の農村革命型パターンを地球大に拡大したものであり、その点からすれば今日の中国の対外認識は、それと大きく隔たっている。

## 米中首脳会談はただのハプニング

こうした状況の中で今日の中国は革命外交よりも国家外交を推進しているわけで、その場合のもっとも具体的な、そしてもっとも象徴的なハプニングが去る二月の米中首脳会談、つまり米中接近であった。

しかしながら米中会談は、その歴史的意味がいかに巨大であろうとも、やはり一つのドラマであり、ひとつのハプニングであって、ショーとしてはいかに華やかなものであっても、具体的なリアリティを直接的に伴うものではない。つまり米中会談があったからといって、明日から米中間で経済関係が急激に活発になるというようなものではない。

特にこの問題にはベトナム戦争の終結を待たなければならないという要素もある。

これに比べて周恩来のワールド・イメージからすると、日中関係、特に最近巨大な経済大国としてアジアに大きな力を持ちつつある日本の存在は無視できないものである。この日本にたいして従来の中国のように、〝米日反動派〟、あるいは〝軍国主義日本〟というイメージだけによって一方的な非難を繰り返していることが、中国にとって、特に敵味方が交錯する今日の多極的な世界において、必ずしも有利ではないという認識の変化がそこ

にはあったに違いない。しかも田中内閣は、かなりの国民的人気を得て登場したがゆえに、日本政府をこれ以上非難しつづけることは、日本国内の対中感情を悪化させるかもしれない、と考えたのであろう。

第三番目に特に重要なのは、今日の中国にとって中ソ対立は単に中ソ国境をはさむ軍事的な脅威として中国に存在するのみならず、いまやソ連の対中国包囲網として着々と進展しつつあることの深刻な認識である。北方の中ソ国境だけではなく南にはインド亜大陸に昨年の印パ戦争、バングラデシュ独立以来、ソ連の影響力が著しく増大していることはすでに周知のところである。これは印パ戦争からバングラデシュ独立にいたるアジアの重大な国際紛争に対して、中国が完全に誤った対応をしたことに反比例して、ソ連の影響力が著しく増大したという皮肉な結果をもたらした。

さらに東に進んでくると、インドシナ半島の北ベトナムは北京、モスクワからともに独立的で相対的であろうとしているが、米中接近によってハノイが〝北京頼むに足らず〟という感じになったことはいなめないわけで、アメリカによる北爆の脅威に依然としてさらされているハノイからすれば、その北爆の当事者であるニクソンをあのように盛大に迎え入れるとは何ごとぞ、という気持ちがあることはいうまでもない。明らかにハノイにとって米中接近――米中会談は、大国同士の醜い結合であると映じ、このことが相対的にソ連のハノイに対する影響力を従来より著しく増大させることになった。

のみならず今日のソ連はシンガポール、マレーシア、フィリピンを含む海洋アジアに対しても着々と手を打ちつつある。考えてみると、中国を中心とする世界地図のその周辺はすべてソ連に包囲されつつあり、残るのは台湾海峡と日本だけである。このように考えるならば、中国にとって日本は〝軍国主義日本〟として批判の対象にいつまでもとどめることはできず、このような国際関係の新しい要因の中で真剣に考えねばならない重要な対象になることはいうまでもない。

ここで注目されるのは、ソ連のグロムイコ外相訪日（本年一月）以来の対日接近、及び日本との協力のもとにシベリア開発を求めるソ連の存在ということである。もしもこのまま

●見本誌贈呈

●実戦指導紙 毎月1、11、21日発行

波動分析による相場展開と戦術

旬刊 マネーゲーム®

購読料 三ヵ月 三、〇〇〇円《商品編》

商品取引を実戦面から解明し、当センター独自の波動分析によって、相場に勝つための予測を的確に解説した旬刊紙です。

商品取引講座

商品取引を系統だって実戦的に集大成した画期的な通信教育講座です。低廉で、短期間に学べるようカリキュラムされ、なおかつ投資による利益追求――。教育と実戦を結ぶかけ橋となることを確信しております。講座料は15,000円です。（案内書呈）

通信教育と実戦指導

日本投資教育センター

東京都港区高輪1―4―26日興ビル
（〒108）☎ 03（445）5122（代表）

なごやかだった上海舞劇団サヨナラパーティ

ども容易に想像される。つまり、軍事的な脅威の対象であるソ連と、経済的な脅威の対象である日本が手を結ぶことは、今日の中国にとって、もっとも恐るべきことであって、そのためにもこの秋に日ソ交渉が始まる以前に田中首相を中国に招き、日中正常化の合意を取りつけたいという考え方が最近の動きの背景にはあるように思われる。

## 日中正常化は周恩来の悲願

第四には、周恩来は中国の政治指導者の中でなんといっても抜きん出た知日派であるということを指摘することができる。おそらく周恩来としては、自分が健在であるうちに日中関係の調整をしたいと考えているであろう。そして彼が覚え書貿易のルートや「日中友好人士」を通じて手を打ってきた日本の友人たちとの関係のなかで、日中交渉という当面の最大の課題を済ませたいという配慮がこのところ大きく働いたように思われる。周恩来とて、すでに七十余歳なのである。

このように考えてみると、周恩来首相という存在が、日中関係にとって非常に大きな意味をもっていることがクローズアップされてこよう。

この点からも今日の対日姿勢の変化の原因を探ることができるが、しかしながら第五番目として考えられる、そして中国にとって今日の最大の問題は、中国がいま持続的・安定的な長期経済建設をもっとも欲している時期だということである。

およそいかなる国であっても、ひとつの経済的な発展段階が達成されるには十年は必要であろう。ましてや中国のように、本質的には農業国である遅れた経済構造を持つ国が工業化し、近代化していくためには二十年、三十年の長期的な経済的プログラムが必要であるはずだが、これまでの中国では五年を単位に一つの経済政策が順調に採用されたことはなく、五〇年代前半の過渡期の総路線、五〇年代後半の「大躍進」政策、六〇年代前半の経済調整政策、六〇年代後半の文化大革命期と、いずれも長くて五年間をメドとして基本的な経済建設の方針が次々に変化してきており、このことが中国経済の再建に非常に大きなマイナスとロスをもたらしてきた。

しかも周恩来の対内イメージからすれば、そして「毛沢東の中国」に対する彼の疑問と

"軍国主義日本"という批判を繰り返してゆくならば、日本の中にある親中国感情はますますソ連のほうに収斂してゆき、日本の財界は、日米経済関係のつまずきを、ソ連との経済関係の打開によって修正していくことになるかもしれない。また「日本列島改造論」を引っ下げて総裁公選に臨んだ田中首相は彼が通産相時代からシベリアのチュメニ油田開発をふくむ対ソ経済関係にさまざまな手を打っていただけに、日本はますますソ連との関係を深めるかもしれないと、中国が懸念したこ

周恩来自身の社会主義観からするならば、中国にとって今後最大の問題は、豊かな社会をつくることであり、経済建設を大いに進めることであって、それによって来たるべき国際化時代に備えることにある。今日、中国をめぐる国際関係はますます流動化し、同時に開放化されつつある。

このことは、中国が閉ざされた社会から開かれた社会へと国際社会に対応していくプロセスであると同時に、一方では中国を閉ざされた社会から開かれた社会に引き込むことによって、中国自身に対し「自由化」の外圧を加えるという外からの潮流でもあるわけで、こうした新しい世界史の変化の中で中国が従来のようなパターンのくりかえしであったならば、おそらく国際化時代に耐えることができないであろうという周恩来の認識があったのではないか。この点でも中国にとって今日、経済建設はさし迫った課題だということがいえる。

## 林彪事件のまき起こした深刻な影響

最後に、この点との関連で考えなければならない第六の重要なポイントは、林彪事件がもたらした衝撃だといえよう。一部には林彪事件はすでに過去のことであって、今日の中国は周恩来のソフトな対外姿勢の中で、このいまわしき事件をあっさりと忘れ去ってしまっているかのように報ぜられている。またすべての悪を林彪に収斂することによって問題はいとも簡単に処理されたかのようにいわれているが中国人は決してそれほど淡泊ではない。文化大革命において、そして中国革命において林彪が果たしてきた役割とその意味を考えるならば、そして林彪失脚によって、ついに毛沢東主席のあらゆる後継者が失脚し、軍のあらゆる最高指導者が失脚したことになるという深刻な事実を考えるならば、林彪事件は中国民衆にとって決して簡単に忘れ去ることのできない深刻な事件としていまなお大きな影をのこしているものと思われる。ましてやいまからわずか一、二年前には七億大衆のあいだに林彪こそ毛沢東の後継者として教え込まれ、『毛語録』は林彪の前書き付きで浸透し、どこの家庭にも毛沢東が林彪とともに手を携えている写真が飾られていたという現実を考えても、事態はそう単純ではない。しかも中国人は過去の出来事をそうあっさりと忘れ去る民族ではない。

この点は一たん批判されるとその罪状が、たとえば林彪においても抗日戦争の時期にさかのぼり、中国革命の段階にさかのぼって糾弾されていることでも明らかだ。

もしも林彪事件をそのように淡泊に考える

健康増進・体質改善
転迷開悟・霊能開発
断食
肉体の毒素を排泄
血液の中性
凡ゆる病
弱アルカリ性維持
気、不幸、災厄は酸性血液及
心身並霊魂の不調和より起る
玄米、野菜、海藻、小魚、果物等の自然食即ち神さま仏さまの食物に食習慣を改善する
人生は修行の場だ。霊格向上こそ窮極の目的である。断食修行中禅定三昧の境地に入る。修行の中に証あり。
断食
食養
精神統一
⊙腹のへらない安全無害老若男女誰にでも
⊙楽しくやれる日本唯一の三本立て指導。
⊙断食は難行苦行に非ず。（説明書贈呈）
（636）奈良県生駒郡三郷町信貴山
電話王寺 0745-73-2507番
宗教法人 大宇宙教
日本断食道連盟本部・会長
信貴山断食道場
修田吉 長道場・道組教

訪中する稲山新日鉄社長を見送る尚向前首席代表

ならば、それは中国人を正しくとらえていないということになる。

そこでこの林彪事件を取り上げてみると、文化大革命が中国にとって、まさに生死存亡にかかわる一大闘争であり、百年、二百年でも続けなければならない、まさに中華人民共和国の存亡をかけた闘争だといわれただけに、そして中国大陸をあれほどの激動の中に投げいれたがゆえに、文化大革命のまさに帰結としての林彪失脚は、きわめて衝撃的な事件であったといわざるを得ないわけで、一方では周恩来外交、周恩来的な内政が着々と進んでいる背景に、これほどの代償を払ったということは、もはや〝革命〟をいくら叫んでも中国の民衆はそれを素直に受け取ることはできなくなってしまったという現実が残されたとも考えられる。

まさに生死存亡をかけた革命、その革命のためにもっとも貢献したと思われた革命的後継者がこともあろうに毛沢東主席を暗殺しようとしたという罪状――この罪状は勝利者が敗北者に対して書き記した罪状だとしか感じられないけれども――をいま中国の民衆は教えられて、それをそのまま信じ再び革命の旗を振るであろうか。中国人に伝統的な面従腹背という性格は、今日『人民日報』に「赤旗を掲げて赤旗に反対する者がいる」という表現として毎日のように出ているが、そのような体質の中でこの問題を考えたとき、今回の林彪事件は周恩来的な内政・外交が固まっていくための大きな代償であっただけではなく、いわば革命中国にとってまさに巨大な代償であったというふうにいわざるを得ない。

その意味からも残された道は豊かな社会をつくり、経済建設を着実に行ない、そのことによって中国を本格的にテイク・オフさせていくことであり、まさにその点に経済大国・日本との国交正常化を求める周恩来の大きな狙いがあるのではないか。

## 謝罪外交で日中問題は解決しない

以上のように考えてみると、今日の日中関係はたんなるムードや気運の中で論じられるにはあまりにも事が重大だといえよう。

日中関係はたんに戦後処理という課題としてだけではなく、まさに経済大国日本がますますエコノミック・アニマルになろうとすることに対して不信や、猜疑心や、反発が国際的に増大している中で、今日新しく世界にその影を投げかけている中国との新たな国家関係を形成するということであり、これを日中両国間の戦後処理の課題としてのみ考えるのは、問題をあまりにも単純化していることになる。

もしも戦後処理ということであれば、日本は平あやまりにあやまることによって日中関係を当面うまく導いていくこともできるであろう。しかしながら、このいわば謝罪外交、ないしは戦後処理外交を一方において日本が

占めている国際的現実に照らしたときには、それだけでは済まされない問題がたちまち出てくるという現実が、今日の日本を取り巻く国際環境の中にあるだけに、問題をそのように単純に考えるわけにはゆかない。

それだけに、むしろ日本にとっては広い国際的視野の中で日中問題を考える——特に日米関係、日ソ関係、対アジア関係——という状況の中でこの問題をどうみるかという視点が重要になってくる。たとえば、今日のアジア諸国は、いま始まりつつある日中交渉を、はたして戦後処理の課題としてのみ見るであろうか。決してそうではなく、アジアにたいしあれほどエコノミックに対応した日本が再び中国大陸に出ていこうとするのか、というふうにアジア諸国は考えるであろう。

この点からもわれわれには考えるべき点が多いように思う。

また一方、今後、日本と中国が七〇年代から八〇年代、さらに二十一世紀にかけてアジアの中の二つの大きな国家として共存していかなければならない場合、当然起こり得る摩擦や軋轢についてもわれわれは十分考慮せねばならない。この点で日中間には正当なルールと一定の距離をもった対応関係を形成するのが、両者のあいだの長期的な安定と共存にもっとも有益だと私には思われる。ウェットな心情のなかで対象にべったりつんのめってゆくことは、日中関係の長期的な安定に資するものではなく、むしろ、ひとたび摩擦がおこると避けがたい反動をもたらすことにもなろう。このことは、最近では日本共産党と中国共産党との一体化とその反目の経過がこのことを一つの重要な例証として物語っている。

外交交渉はある意味ではハプニングの連続であり、そして政治にはタイミングが重要であるけれども、今日の日中関係をみた場合、これは決して正常化へのムードではなくて、その中には非常に異常な動きがあることを考えてみなければならない。

はたしてこのような対応が日中関係の長期的な安定に資するものか、はたして本物であるのかどうか、そして周恩来を中心とする中国側の非常にきめの細かい長期戦略に耐え得るだけのビジョンを日本側が持ち得ているのかどうか、この点になるとまったく心もとないというほかはない。

日中関係はいよいよ機が熟したといえよ

灘のかたちNo. 1

暖気樽

この樽の中に熱湯を入れ、蛋白質分解、糖化などの作用により、こうぼ菌の繁殖をはかる。杉製。灘酒づくりの小道具は、今では一種の記念物的存在で、灘300年の酒づくりのこころを連綿と伝えている。

日本のこころ

灘の酒

灘五郷酒造組合

う。だが同時に機が熟すればこそわれわれとして考えるべき問題点が多いように思われる。この点からみても中国側がいまなにを考え、なにを望んいるのかを、われわれ自身も深く推察してみることは決して無駄ではないだろう。

## 盲目的な日中接近は孤立化を招く

それでは次に日中関係の近い将来にどのような問題が出てくるのであろうか。

もしも今日の日本の財界や政界の一部が欲しているように、日本が中国を再び市場とすることによって、日中関係が日本の経済的な利益に直接つながるであろうという見通しを一方的に持ち続けた場合、そしてまた私が先に推測したような形で中国が今後いわば工業化へ向かっての離陸を進めていく場合、そこには多くの問題が出てこよう。

まず第一に、中国にとって当面は、日本からの経済協力、つまり資本輸出、無償供与をはじめとして、特に技術の導入はもっともさし迫った課題であろう。中国が先日、わが国のなかでもベトナム特需、台湾との関係、東南アジアでのエコノミック・アニマルぶり等等、どの点からしてもつい最近までの中国ならもっとも激しく非難の対象とすべき三菱グループの首脳を招き、周恩来がこれを歓迎しているのは、この点で象徴的な事実であろう。

そして中国側は借款、贈与などをいますぐ受け入れようとはしなかったが延べ払い輸出には大いに関心を示したのであった。この点がさらに将来、資本輸出、借款贈与へとつながらない保証はない。そして、多くの財界人は、今日、中国が賠償要求を提起することをむしろ願っている観があり、かつてのアジア賠償にからむ利権のような夢を見ているのかもしれない。

だが、今日の中国は基本的には〝自力更生〟を中心とする自己完結的な経済体系をつくっていくものと思われ、その場合に当面は日本のプラントを是非必要とするのであろうが、しかし、一台、二台のプラントは輸入しても三台目は自分でつくろうと中国は考えるであろう。にもかかわらず三台目も四台目も中国に売りつけようとする対応を日本がおこなうならば、これこそ〝日本帝国主義の正真正銘の中国再侵略だ〟という形で、中国側が大きく平手打ちをくらわせてくる可能性は十分にあり得ることである。

今日の財界の中国傾斜は、まさにエコノミック・アニマルの見本のようなものであるが、このような可能性についてもわれわれは当然、考えてみなければならない。

一方、日本の政財界が考えているほど日中関係が甘い幻想の中で処理できなくなった場合、あるいは依然として消費社会ではない中国が近い将来、経済的利益の対象にはなり得ないことが明らかになった場合、今日のように物ほしげな対応をする日本の政財界が急激に中国からの離反へと移行していく危険はないだろうか。

いずれにせよ、今日のような実利主義的な対応には、それなりのリスクが伴うことを覚悟すべきである。

第三に、日本の政財界は、日中間の急激な展開のなかで、経済的・人的には台湾との関係をつづけ、逆政経分離が可能であると考えているようであるが、中国は当面、日中打開へのみずからの必要性のゆえに、このことを是認するとしても、将来的にもそのような二足のわらじがはけるものかどうか、中国はそ

## アンケートにご応募ください

毎月「現代」をご愛読くださいましてありがとうございます。おかげさまで「現代」も、みなさまの暖かいご支援により、創刊六年目の秋を迎え、編集部一同、新たな躍進を目ざしはりきっております。

これからも、刻々と移り変わる情報化社会を先取りし、サラリーマンはもとより全国民必読の最新情報を厳選し、お伝えするよう努力してまいります。つきましては、みなさまのご意見、ご要望を誌面に反映させ、一層充実した雑誌をつくるため、アンケートをお願いしております。

はさみこんである「愛読者カード」の各項目に記入または○をつけて、九月末日までにお送りください。抽選のうえ**一名さまに現金一万円、五十名さまに三千円**を贈呈します。みなさまの率直なご意見、ご要望をお寄せくださるようお願い申しあげます。

### ご応募の中から 1人 1万円 50人 3千円 贈呈します

「現代」八月号で、読者のみなさまにお願い致しましたアンケートでは、率直なご意見、ご批判をお寄せいただき、ありがとうございました。今後とも「現代」をご愛読くださいますよう、お願い申しあげます。

■一万円（鳥取）坂手計夫■三千円（北海道）松村友吉、加藤達美（岩手）佐々木正男（宮城）大江英男（山形）幸尾隆（福島）山崎吉晴（茨城）黒田滋（栃木）藤倉昭一（群馬）川添光芳（埼玉）根岸保（千葉）鞠湖千恵、土田英夫（東京）安藤宏、田中裕也、吉田弘子、村山秀、後藤博雄、森田喜代子（神奈川）中西年春、鈴木直彦、横山弘一（新潟）酒井勝夫（富山）堀内久義（岐阜）西浦能雄（静岡）大石稔（愛知）木村治（三重）鵜飼富博（滋賀）沢田己喜夫（京都）西山喜久（大阪）桑田洋太郎、吉田功（兵庫）瀬島孔、高瀬昭夫、田中崔子（奈良）木下次郎（和歌山）岩田俊子（島根）日野勝美（岡山）土橋松一（広島）小川次郎（山口）矢田稔（徳島）松原善郎（香川）山口新也（福岡）上村律子、石田秀美、柳譲（佐賀）殿川政道（熊本）前田博実（大分）藤本政敏（宮崎）二見勉（鹿児島）松永吉次

現代編集部・読者調査係

れほど甘くないように思われる。一方、台湾もそのような選択を許すであろうか。この点についての保証はまったくないのだ。この点での保証がもしも得られなくなったとき、わが国の政財界は、どのような対応を示すのだろうか。

第四にはアメリカ、そしてソ連さらには東南アジア諸国が、今日のような日中関係のムードをいったいどのように受け止めて今後の対日政策を考えるかという点である。私はむしろ最近の日中関係ののめり込みによって、日本はこれら諸国との関係における外交的な選択の幅を著しく狭めてしまったと考えている。もしもそうではなくて日中関係がこのような形で進んでいっても日本は日米、日ソ、そして東南アジアともうまくやれるのだというふうに考えるのであれば、それはあまりにも虫がよすぎる。ただでさえ目ざましい日本の〝躍進〟に対し、反発や不信感が高まっている今日の世界が、そのような日本を坐視しつづけるであろうか。

いまや日中関係の将来は、まさに大きな国際的影響をもち得るだけに、まだまだ検討すべき様々な問題点があるように思われる。

# 私の暮らした中国

## 向こう三軒両隣

給料、物価から夫婦ゲンカまで誰も書かなかった
裸の中国ありのまま

佐々木ハル子
（元・天津工人病院看護婦）

### 「不要拡大、不要縮小」

一人娘の王虎子（ワンハーズ）（日本名・佐々木律子）を連れて、中国の天津から実に二十九年ぶりに日本へ帰ってきて、そろそろ一年になります。はじめは社会制度の違いからとまどってばかりいた私たちも、ようやく生活に慣れはじめたところです。

私が看護婦として、故郷の岩手県から中国へ渡ったのは昭和十七年。二十四歳のときだった。勤務先は、満州（中国東北地区）チチハルの満鉄病院である。それからわずか三年間が、私にとって比較的のんびりした、つかの間の青春だったといっていい。

敗戦の大混乱の中で、日本人医師と看護婦は現地留用となった。私は帰国をあきらめ、交通公司の王紹良（ワンシャオリャン）という中国人と結婚し、夫の郷里である天津へ、解放の年の昭和二十四年に移った。そこの工人病院へ看護婦として勤めはじめる。

翌年、王虎子が生まれたが、その三ヵ月後に、夫を肺炎で失った。それ以来帰国するまで、ずっと工人病院に勤めていた。

四十歳を過ぎて、私に転機がおとずれる。